

学位論文題名

第二言語の視覚的単語認知処理

－日本語母語話者と中国語母語話者の単語認知処理パターンについて－

学位論文内容の要旨

本論文は、外国語（以下、第二言語と呼ぶ）の書字単語の認知処理の性質を明らかにしようとしたものである。

書字単語の認知処理の性質、すなわち視覚的単語認知の処理特性は、母語と第二言語との間で大きく異なることがある。母語の書字単語の認知処理は、習得者が自然に身に付けた処理であり、その処理パターンは母語の言語特性、特に表記体系の特性を反映した形で形成されたものと考えられる。一方、第二言語の場合には、その書字単語の処理パターンは必ずしも第二言語それ自体の言語特性を反映した形で形成されるとは考えられず、母語で形成された単語処理パターンが何らかの意味で影響を与えると考えられる。本論文は、英語、日本語、中国語のそれぞれを第二言語として学習している日本語と中国語の母語話者を対象として、それらの第二言語の書字単語の認知処理を求める心理学的実験を数多く実行し、それらの実験結果を基に、第二言語学習者が第二言語の書字単語を認知する際にどのような処理パターンを用いるのか、また、その処理パターンはどのような特性を有するのか、について詳細な分析と考察を加えたものである。

本論文は、5章から構成されている。第1章「序論」では、言語の表記体系の特性の概説、視覚的単語認知過程に関する理論的研究の展望、母語と第二言語のそれぞれの書字単語認知に関する先行実験研究の成果の展望をそれぞれ行った後、本論文の問題と目的を述べている。第2章から第4章では、著者が行った10種類の実験研究を報告している。第2章は、母語と第二言語の表記体系に注目し、母語の表記体系と第二言語の表記体系が同じ場合および異なる場合の第二言語の書字単語処理パターンの特徴を調べ、母語の表記体系と第二言語の書字単語の認知処理パターンとの関係について考察している。第3章は、第二言語の習熟の程度と第二言語の書字単語処理パターンとの関係について検討している。第4章は、単語の頻度（出現頻度、使用頻度）と第二言語の書字単語処理パターンとの関係について検討している。

第2章「第二言語の書字単語の認知処理パターンの特性と母語の表記体系の関係（実験研究1～5）」では、日本語母語話者と中国語母語話者を対象とし、彼らが各第二言語の書字単語を認知する際に用いる処理パターンの特徴を明らかにしようと試みている。実験1～3では、意味カテゴリー判断課題と語彙性判断課題という2つの異なる課題を用いて、英語を第二言語とする場合の書字単語の処理パターンを検討している。実験の結果から、日本語母語話者は綴り情報よりも音韻情報をより多く利用するが、中国語母語話者は音韻情報

よりも綴り情報をより多く利用する、ということを明らかにしている。実験 4 では、中国語母語話者が日本語を第二言語とする場合の書字単語の処理パターンを検討している。その結果、中国語を母語とする日本語学習者の書字単語の処理パターンは、母語の書字単語の処理パターンと同じく、綴り情報をより多く利用する特性をもつことを明らかにしている。実験 5 では、逆に、日本語母語話者が中国語を第二言語とする場合の書字単語の処理パターンを検討している。実験の結果、日本語を母語とする中国語学習者は、中国語漢字単語を認知する際に、綴り情報と音韻情報を共に利用した上で、綴り情報をより多く利用することを明らかにしている。以上の 5 つの実験の結果から、著者は、第二言語の書字単語の処理パターンが各自の母語の表記体系の影響を受けることを明確に結論づけている。

第 3 章「第二言語の書字単語の認知処理パターンの特性と習熟度の関係(実験研究 6~7)」では、意味カテゴリー判断課題と語彙性判断課題の 2 つの課題を用いて、日本語母語話者と中国語母語話者のそれぞれが、第二言語である英語の書字単語を認知する際にどのような処理パターンを用いているかを検討し、それぞれの処理パターンが、第二言語の習熟度が上がるにつれてどのように変化するかについて調べている。実験 6 では、語彙性判断課題を用いて英語中級学習者と上級学習者を比較している。その結果、中級学習者と上級学習者の英語書字単語の処理パターンは基本的に同質であり、共に母語の書字単語処理と類似する処理パターンを示すこと、しかし、同時に、上級学習者は中級学習者よりも母語からの影響が少なくなること、を明らかにしている。実験 7 では、意味カテゴリー判断課題を用いて、中国語と日本語を母語とし、異なる習熟度を示す英語学習者を対象とし、彼らの英語単語の処理パターンを比較検討している。その結果から、どちらの母語話者も、中級学習者の場合には、綴り情報と音韻情報のどちらかをより多く利用する傾向があるのに対して、上級学習者の場合には、綴り情報と音韻情報の利用に偏りが弱まることを明らかにしている。以上の成果から、本章の最後では、第二言語の習熟度が上がるにつれて、母語の処理パターンからの影響は徐々に減少し、第二言語自体の処理パターンが形成されてくるであろうことが考察されている。

第 4 章「第二言語の書字単語の認知処理パターンの特性と単語頻度の関係(実験研究 8~10)」では、単語の出現頻度の高低(高頻度単語と低頻度単語)によって第二言語の書字単語の処理パターンがどのように変化するかについて検討している。実験 8(英語単語)、実験 9(日本語単語)、実験 10(中国語単語)の結果はともに、高頻度単語でも低頻度単語でも、学習者がその第二言語の書字単語を認知する際に、基本的に同質の処理パターンを用いるが、単語の出現頻度が異なると、その音韻情報と綴り情報の利用の程度が変化することを示すものであった。著者は、この結果を踏まえて、単語の頻度と認知処理パターンとの関係について考察を加えている。

第 5 章「総合的考察」では、本論文で行った 10 種類の実験研究の結果をまとめ、第二言語の書字単語の処理パターンの特徴とはどのようなものであるかについて考察している。著者は、母語の表記体系、第二言語の習熟度、単語の出現頻度という 3 つの側面から、第二言語の書字単語の認知処理の性質について考察を展開している。その上で、著者は、第二言語の書字単語の認知処理に母語の書字単語の処理パターンからの影響があること、さらには、第二言語の習熟の程度に応じてその影響のあり方も変化すること、を指摘している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 阿 部 純 一

副 査 教 授 田 山 忠 行

副 査 教 授 高 橋 英 光

学 位 論 文 題 名

第二言語の視覚的単語認知処理

－日本語母語話者と中国語母語話者の単語認知処理パターンについて－

本論文は、外国語（以下、第二言語と呼ぶ）の書字単語の認知処理の性質を明らかにしようとしたものである。書字単語の認知処理の性質、すなわち視覚的単語認知の処理特性は、母語と第二言語との間で大きく異なることがある。母語の書字単語の認知処理は、習得者が自然に身に付けた処理であり、その処理パターンは母語の言語特性、特に表記体系の特性を反映した形で形成されたものと考えられる。一方、第二言語の場合には、その書字単語の処理パターンは必ずしも第二言語それ自体の言語特性を反映した形で形成されるとは考えられず、母語で形成された単語処理パターンが何らかの意味で影響を与えると考えられる。本論文は、英語、日本語、中国語のそれぞれを第二言語として学習している日本語と中国語の母語話者を対象として、それらの第二言語の書字単語の認知処理を求める心理学的実験を数多く実行し、それらの実験結果を基に、第二言語学習者が第二言語の書字単語を認知する際にどのような処理パターンを用いるのか、また、その処理パターンはどのような特性を有するのか、について詳細な分析と考察を加えたものである。

本研究では、母語として日本語と中国語の複数の言語を対象とし、外国語（第二言語）としても英語、日本語、中国語の複数の言語を対象とする形で、第二言語の書字単語認知の処理特性を明らかにしようとしている。従来の研究としては、中国語、韓国語などの単一の表記体系をもつ母語話者を対象とし、外国語（第二言語）としては英語のみを対象とする研究が主であり、本研究のように、複数の母語、複数の第二言語を対象として、同時に比較検討した実験研究はまれである。また、本研究は十分な数の実験を重ねており、そこから得られたデータは信頼性の高いものとなっている。これらの点での、本論文の著者王崙氏の意欲的な姿勢と実験遂行力とは、まさに賞賛に値する。

本研究では、上記のとおり、英語、日本語、中国語それぞれを第二言語として実験を実施している。その上で、本研究では、第二言語の書字単語の認知処理特性を、先行諸研究の結果も含めてより広く、より一般性の高い形で整合的に説明することを試みている。そしてその結果として、母語の表記体系が第二言語の単語処理に影響を与えるということにより一般性の高い形で確認することに成功している。また、本研究では、先行研究で検討されていた単一の表記体系の言語についてのみならず、日本語のような表音表記と表語表

記の複数の表記体系をもつ言語についても検討している。そして、その結果から、日本語母語話者は、第二言語の書字単語を認知する際に、その第二言語の表記体系に応じて、音韻情報重視の処理パターン（すなわち仮名单語処理パターンと同質の処理パターン）を用いるか、綴り情報重視の処理パターン（すなわち漢字単語処理パターンと同質の処理パターン）を用いるかを選択的に使い分けているのではないか、という可能性を示唆している。この新しい仮説の提出は、日本語母語話者と中国語母語話者を同時に比較検討した本研究から生み出された考えであり、本研究の独自性を示す一つの成果といえる。

本研究のもう一つの成果は、第二言語の習熟度、および、単語の頻度が、第二言語の書字単語の認知処理に影響を与えることを確認した点にある。すなわち、本研究では、母語の書字単語の認知処理が第二言語の書字単語認知に影響を与えることを確認した上で、第二言語の習熟度が上がるにつれて、その母語の処理パターンからの影響が徐々に薄れ、第二言語独自の単語処理パターンが形成されていくことを指摘している。また、第二言語の書字単語の頻度が高ければ高いほど、その処理パターンは母語の処理パターンの影響から離れ、その第二言語の母語話者の処理パターンに近づいていくことを確認している。第二言語の習熟度と単語頻度の違いによって第二言語の書字単語の処理パターンに変化のあることを実験的に確認したのは、本研究が初めてである。この成果も本研究がもつ当該研究領域への一つの貢献といえる。

本論文は、第二言語の書字単語の認知処理に母語の書字単語の処理パターンが強く影響を与えていることを、より一般性の高い形で明確に確認し、さらには、第二言語の習熟の程度と、対象とされる単語頻度の、それぞれの違いに応じて、その母語の単語処理パターンの影響が異なることを実験的に確認したものといえる。これらの研究成果は、当該研究領域に一定の学術的貢献をなすといえる。そのことは、本論文中に記されているいくつかの研究成果が、我が国の当該研究領域を代表する査読付き学会誌に複数編受理されていることから確認できる。

以上により、本委員会は本論文の著者王崙氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。